夢と志【学校通信】

平成 25 年 11 月 18 日

第 57 号

西中の風

～『信頼と笑顔』毎日1,500の思いやりあふれる学校生活 ～

伊丹市立西中学校長
豊田　實

笑い「考」

曽野綾子さんの随想（11/11付神戸新聞）を読んで思うところがありした。
掲載されたものは次のとおり（抜粋）、

> ・・・昔はほんとうに笑い出さずにはいられないようなことがよくあった。たいていは、自分や他人の失敗に直面した時である。人は、どういう時に笑うかと言うと、おかしい時ではなく真実を見せられた時、安心して笑うようである しかし最近の人々はあまり厳しい現実に直面していない。
> テレビの世界などことにひどい。登場する人たちは、驚くべきことでもないことに驚いてみせ、別に頭や耳が悪いのでもないだろうに、わざと大仰に聞き返す。それほどいつも幸福でもないだろうに、いつもいつも笑っている。・・
> テレビやマンガの世界ばかりに触れて、汗をかいたり、重かったり、疲れたり、寒かったり怖かったり、というような肉体的感覚を持つ実人生に触れなくなった人々は、どこか人間離れしてきた。・・・

多くの方が気づいておられると思いますが、子どもたちは、となるとどうでしょうか。バラエティ番組と呼ばれるものは大部分、意図的にあらかじめ録音された笑い声が絶妙のタイミングで挿入されています。「何人かの混じり合った笑い声」や「感心するフーンとかヘェ～」といったどよめきも視聴者の興味を惹く効果音として使われます。

たぶん、人は無意識のうちに笑い声には、引き込まれるものなのでしょう。冷めた見方をすると考えられる向きもあろうかと思うのですが、かなり前からこういった番組づくりには違和感がありました。出演者は終始笑顔で感心したり、うなずいたりといった表情で演じているようです。テレビ番組は多様であり、内容までは問題にしない感想ですが、スタッフと共に芸能人、タレントなど出演している人達は懸命に番組作りをする立場であり、そのことが彼らにとって仕事なのです。

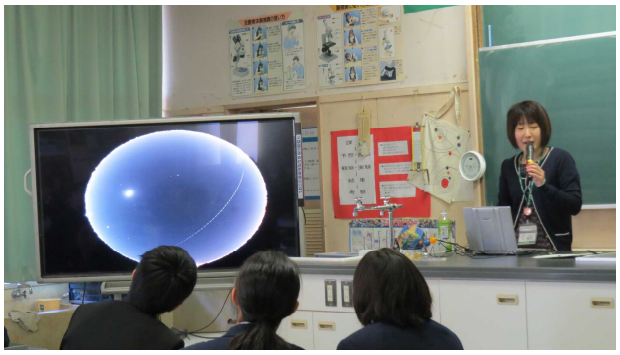
ものの本質を見抜くといった感性を生徒たちに養いたいものです。先日の文化祭では生徒、保護者、職員など、来場した人々が、合唱コンクールのハーモニーを全身で聴き取ったり、ステージ発表で盛り上がったりして、感動と共感を分かち合うことができました。

先週、行われていた３年生国語授業では、’「正しい」言葉は信じられるか’という主題で二つの新聞の読み比べを勉強しました。１つの事象が記事となったとき事実として伝えられることは、文章記述の異なりによって肯定的にも、否定的にもとらえられることをグループで話合いました。物事を見極める、判断するといった深い思考力を身につけられる学習でした。

当「西中の風」表題に記しているキャッチフレーズは、「信頼と笑顔、毎日1,500の思いやり溢れる学校生活」としています。540人余の生徒一人一人が、一日３つ思いやりの行動を心がけることで、校内には毎日1500を超える温かいふるまいで満ち溢れることになります。実に様々な学校での出来事や成果を「西中の風」や「学年通信」また「ホームページ」などでお知らせしています。教育活動で見られる子どもたちの笑顔には正真正銘の輝き（笑顔）があるのです。

３年生理科特別授業『宇宙の不思議』
11/14 ～ 15
指導者　伊丹市立こども文化科学館
市 川　美 沙　学芸員

鮮やかな映像を電子黒板に映しての説明でした。生徒たちは天文学に関する専門的な知識も得ながら興味深くお話を聴きました。



ホームページには授業の詳細（約9ページ分）をアップしていますのでご覧ください
※写真クリックから詳細へ（「こちらから」）